

平成21年5月13日現在

研究種目：基盤研究（A）  
研究期間：2006～2009  
課題番号：18203037  
研究課題名（和文） 技術・工業教育の教員養成プログラムの評価システムと学生の能力実態に関する国際比較  
研究課題名（英文） International Comparative Study on Assessment System of Technology and Industrial Teacher Education Program and Student Achievement  
研究代表者  
田中 喜美（TANAKA YOSHIMI）  
東京学芸大学・教育学部・教授  
研究者番号：00115247

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：教育学、教員養成、技術教育、工業教育、教育評価

## 1. 研究計画の概要

本研究は、職業教育制度の類型が異なるアメリカ合衆国、フランス、ドイツ、スウェーデン、韓国、日本、計6カ国の技術・工業教育の教員養成プログラムを評価するシステムの制度とその実態に関する国際比較調査を行い、各国における主要な特徴と課題を明らかにしつつ、それらを総合して、評価システムの面からとらえた技術・工業教育教員養成の同時代像を構成しようとするものである。

## 2. 研究の進捗状況

(1) アメリカ合衆国の技術・工業教育教員養成プログラムの評価システムに関しては、認証制を取り上げ、近年改定された認証基準に基づく認証過程の実態を、イーストミシガン大学を事例として3年間継続調査した。また、認証制に大きな影響をもつ専門職団体ミシシッピヴァリ技術教育教員養成会議総会に毎年度参加し、全米の動向を把握してきた。

(2) ヨーロッパの3カ国に関しては、ボローニャ・プロセスの実施状況とそこにおける各国での矛盾の展開のあり方という視点をもって調査した。

①フランスの技術・工業教育教員養成プログラムの評価システムに関しては、エクスマルセイユ教員養成大学院 IUFM を事例として3年間継続調査、その実態を検討した。また、修士1年目修了時点で実施される国家試験の実際について検討してきた。

②ドイツの技術・工業教育教員養成プログラムの評価システムに関しては、同国独自の制度である二段階教員養成における大学の部分に関してはオルデンプルク大学とミュ

ンスター大学を事例として、試補制度の部分に関しては、ミュンスター大学と共同でミュンスター市のStudienseminareの一つを事例として2年間継続調査してきた。

③スウェーデンの技術・工業教育教員養成プログラムの評価システムに関しては、ヨーテボリ大学、リンショーピン大学、ストックホルム大学、ウメオ大学を事例として、スロイド科、技術科、工業科の分野ごとに現地調査をしてきた。

(3) 韓国の技術・工業教員養成プログラムの評価システムに関しては、技術科に関し忠南大学校、韓国教員大学校、デーブル大学校を事例として、工業科に関しては忠南大学校を事例として、その実態を調査してきた。また、教員採用の国家試験の実際について検討してきた。

(4) 以上により、①これらの国における技術・工業教育教員養成は、実態として、修士課程修了が教員資格を取得するための基礎的な要件になっていること、②ただし、スウェーデンの工業教員養成は実務経験が重視され、独特の制度実態があり、相当な困難に直面していること、③評価システムとしては、フランスと韓国においては学生に対する国家試験、アメリカにおいては認証制が基本になっている一方、ドイツにおいては従前二段階の州試験であったものが、第一段階の試験を廃止して認証制が導入されつつも、まだ模索状況にあること、スウェーデンにおいてはこうした評価システムがとりたてて顕在的には認められないこと等が明らかになった。

### 3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

〔理由〕

(1) 日本を除く対象国5カ国の現地調査を計画通りにすべて実施し、当初の計画において明らかにしたいと考えていた事項はほぼ知ることができた。

(2) 現地調査の過程で、事例として取り上げた大学の教授スタッフを中心に、現地の研究者との人的なネットワークをつくることができ、継続的な共同研究を行う基盤を構築することができた。

### 4. 今後の研究の推進方策

これまでの3年間は対象国の現地調査を個別に実施し、そこでの実態を具体的に把握することに集中してきた。

最終年度にあたる平成21年度は、本研究プロジェクトの関係者全員による合宿研究会を複数回開催する。

そして、①研究開始当初、仮説的に設定した国際比較をするための分析枠組みを調査事実に基づき再検討し、必要な修正を施しつつ、②当該分析枠組みに基づき、各国の制度と実態を比較しつつ、その主たる特徴と課題を整理し、さらに、③それらの全体を総合して、今日における同時代像を構成することを試みる、そして、④その成果を論文としてまとめ発表する。

### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

①田中喜美、木下龍、米国での技術教育教員養成に関する認証制の形成－V.C. フリックランドの活動を中心として－、産業教育学研究、第38巻第2号、印刷中、2009、査読有り

②田中喜美、海群、学習指導要領改定と技術・職業教育、技術教育研究、第67号、24～31頁、2008、査読有り

③疋田祥人、田中喜美、Questioning Period Subdivision of History of Manual Training in Pre-World War II Japan、学校教育学研究論集、第13号、169～180頁、2007、査読有り

④田中喜美、環境問題と産業教育、産業教育学研究、第36巻第2号、1～8頁、2007、査読有り

⑤木下龍、田中喜美、米国での技術教育のための大学における教員養成と生産技能の位置づけ－R.W.セルヴィッジの作業分析に着目して－、日本教師教育学会年報、第14号、70～79頁、2006、査読有り

〔学会発表〕(計1件)

①田中喜美、木下龍、V.C. フリックランドの技術教育教員養成の実践と研究、日本教育学会第66回大会、2007年8月30日、慶応大学

〔図書〕(計1件)

①佐々木英一、斉藤武雄、田中喜美、依田有弘編著、学文社、ノンキャリア教育としての職業指導、2009、275頁